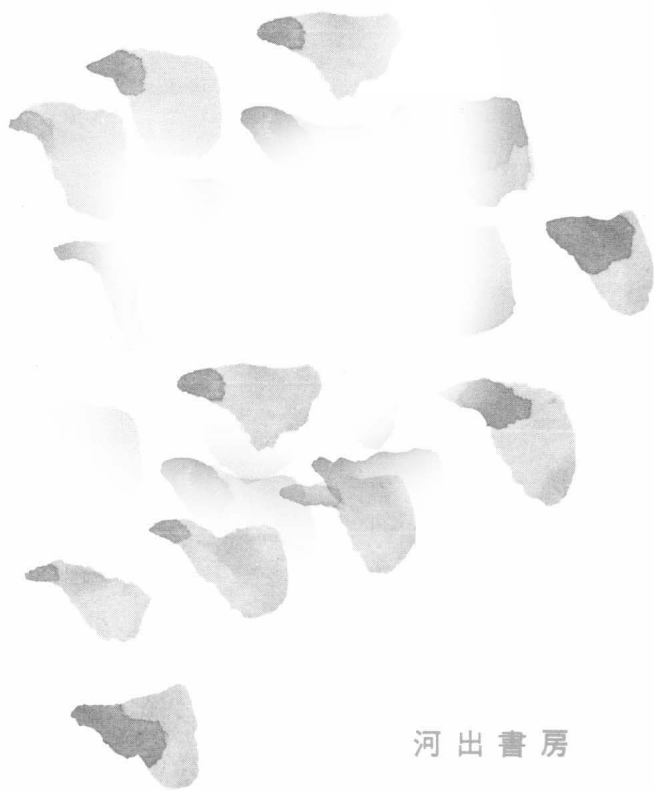


なつこぶし

宗谷真爾



河出書房

著者略歴

本名、宗谷真。大正14年、千葉県に生まれる。慶応病院、引佐日赤を経て、野田市上花輪871の現住所に医院を開業。昭和38年、「なっこぶし」で第7回農民文学賞、「鼠浄土」で第8回中央公論新人賞を受賞。『文芸首都』同人、『野田文学』を主宰。著書に長篇小説『動悸と人形』がある。

なっこぶし

定価 三三〇円

昭和三十九年六月二十五日印刷
昭和三十九年六月三十日発行

著者 宗谷真爾

発行者 河出孝雄

印刷者 中内佐光

発行所 株式會社 河出書房新社

東京都千代田区神田小川町三の八
振替 東京一〇八〇二
電話 東京(二九)三七二二

目次

なつこぶし……………三

鼠浄土……………三元

あとがき……………二七

な
っ
こ
ぶ
し

な
っ
こ
ぶ
し

第一章

刈ったばかりの稲をのせ、お春は源五郎船をこいでいた。とくろまく水草が、船の進行をさまたげ、いらだっている竿のさきへからんでくる。

「チクショウめ！ バカにして！」

舌うちをしながら、竹竿を舐先から蒼くよんだ水にいられてかきわけたが、草はヌラヌラと左右にゆれただけだ。長さのない不安定な源五郎船は、鱸もべりまで水にひたり、稲穂がたれさがって水のなかへ顔をつっこんだまま、水草の暗礁にのりあげていた。幅一間ほどの灌漑用の小川が、刈りとった稲を家までとはこぶ交通用の要路であったが、その途中で船とともに立往生していた。

勢いよくお春は水のなかへとびこんだ。川は意外にふかかった。水が、田股たんもも引の膝をこえてふとももまでしみこんでくる。

「このヤロウ！」

障害物がひどく癪にさわっていた。紺緋の袖をたくしあげると、両手を水に入れて、草をひきぬ

いた。一束の蔓状の草が、肥沃な黒い土をつけたまま水面からとびだした。幾束かの草を小川の堤の上へなげだすと、お春は空をみあげながら、ハアハア、ふかい息をはずませた。

群青が溶けるような空を、稔りの秋が流れていた。船底へペタリと腰をおろすと、思いだして掌をひろげた。ひとにぎりの土の上に、鬼の面のような堅い皮をかぶった、親指大ほどの水草の実がのっていた。とげとげしく角を出したなっごぶしである。お春は犬歯を堅い皮にあてて噛みくだいた。クリームいろの実が、ねりミルクに似た果汁をにじませながらのぞいた。山羊が、胡瓜きゅうりをかじるような健康な歯音。うすい甘味にまじって、かすかな渋味が舌のさきを刺激した。

「お春さん、おめえ、そこでなにしてるんだ？」

おなじ部落の酉蔵とりぞうという青年だった。だれもみているものはあるまいと、無作法に船へあぐらをかいていたお春は、ギクリとしてなっごぶしを膝の下へかくした。

「んん、なんでもねえ……」

トボけて空をみあげた。灰色の小さい雲が湧いたように、群がる雀が、翼と翼を交錯させて飛びすぎていった。透明な金色の眼差が降りそそいで、お春の頬をほてらせる。

つややかにひかるその顔をみながら、酉蔵はあっけにとられたように呆然としていた。

「酉蔵さん、また秋祭りには、いっしょにおどるべよなあ」

お春はたちあがって竹竿を水にたてた。力まかせにこぐと、船はグラッと大きくゆれて、すべるように動きました。

酉蔵が船をみおくっていた。紺地木綿の半纏はんてん、田股引の膝たんももひきのあたりに、泥が地図状に境界線をつ

くって、へばりついたままかわいていた。膝の下と足首のところを、藁でむすんである。お春は、がめをつくって西蔵の顔をチラッとみた。決していい男ではない。だが、なぜかこのましい青年だと思った。背もさして高いとはいえない。顔はどちらかというと黒いほうだが、鼻筋だけはくっきりとしてしまりがある。だらしない顔ではないのだ。頭のなかで一瞬、西蔵のそんな印象がぎざみこまれたが、まもなく消えていった。

お春は船をこぎつづけた……。

部落は、下総の国の北端にちかかった。廃藩置県によって千葉県東葛飾郡という名前をつけることになったが、むかし、十郎左右衛門という庄屋があつてこの地を開拓し、羽振りをきかしたところから、村の名は十郎左右衛門新田という、たいそう長い名前と呼ばれた。

明治初年のそのころは、小学校へあがる子供たちすらかぞえるほどしかなかった。この部落のように戸数のすくないところでは、なおさらのこと、お春もその例に洩れなかった。イロハこそ読めないが、はげしい気性とともに、人一倍饒舌だった。また、カモシカのようにだと噂した。お春の機敏な身のこなしは、文字どおりのカモシカであつたと言つていい。顔の色は桜桃のようにあかく、はちきれるばかりの新鮮さが、若者たちの注意をさらつた。

こんなことがあつた。

村の悪童連があつまつて評定をひらいた。喜助も、弥吉も、もう一人の若者も不良だったが、こゝとに喜助は評判の色事師だった。

「どうだい、今夜はアカんとこへいってみようか」

お春にはアカという渾名あだながあった。血色のいいところからつけられた呼び名である。

「しかし、アイツはちとてごわいぞ」

「なあに、アカだって女だ。むしろあんなのにかぎってモロいもんだ。つよがりだけで男をしらねえから、すくなびくさ」

評議は一決した。

夜がくると、半月が細い針に似た光の束を畦道やたんぼに降らせた。手拭いでほうかぶりをした三人は、ゴソゴソと櫟の垣根をくぐった。

「うわあ、クモの巣がひっかかった」

掌で自分の顔を下からなであげる弥吉に、

「だまってる！」

喜助がたしなめた。

ひろい庭が森閑と眠っていた。ダルマ形の池で、鯉が口を水面に出して、夜気を吸うはぜるような音だけがきこえていた。三人はしばらく池の端にたたずみ、周囲の音に耳を澄ましていた。月光が水面につきあたってはねかえる。喜助がさきに立った。後ろの二人を手まねきして、雨戸のすぐそばにある大きな朝鮮櫛ちようせんまきの下へさそってゆき、ひとかたまりに集結した。

「どうだ弥吉、やってみるか？」

「いやあ、喜助アニ、おめえやってみてくれ」

「なんだ、意気地のねえ。じゃあ、おれが模範をしめすから、よくみておけ！」

喜助は二人を櫛かみの木の下へ残してちかついた。トントンとかるく雨戸をたたいた。たたきたびに、かがみこんで様子をうかがう。そんな動作をなんどくりかえした。なかからだれかが戸口の方へやってくる気配がし、心張棒をはずす音がした。喜助はすばやく縁の下へかくれた。雨戸がひらき、

「ダレ？」

といぶかるように声をかけてきた。弥吉は、それがまちがいなくお春であることを、木の下にかがんだままたしかめると、そのままの姿勢で手をふって喜助に合図した。すかさず喜助は縁の下からとびだしていった。

「おれだよ、お春さん！」

お春はだまったまま、喜助のややしゃくれあがった顔をみつめた。

「こっちへこいよ。いいことをおしえるから……」

「やだよ」

「そんなこといわねえで、こっちへこいよ」

トボけた声をあげて、木蕨みんずくが鳴いた。煙草の煙に似た雲が流れて、月が飛んでいるようにみえる。そのたびに、庭さきが明るくなったり暗くなったりする。お春は首をかしげて考えるようなふうをしたが、寝巻きに羽織りをひっかけたまま、庭へ降りてきた。喜助は右の掌をひろげてお春の背中にあてがい、いたわる風情をつくりながら、五本の指にまつわる感触を楽しんでいた。二人は

畑の方へ歩いていった。それから喜助は、ごく自然に後ろへまわると、羽交いじめのかたちで、乳房のふくらみへ手をやった。

「でかいオッパイだなあ」

お春は、くるりとふりかえった。不審気なお春の口もとへ、喜助はすかさず自分の唇を持ってゆくことを忘れなかった。その刹那、一尺ちかくも地面からとびあがり、苦痛に顔をゆがめながら尻餅をついたのも喜助だった。両手は、自分のまたぐらをかかえていた。お春の右足が、突然容赦なく、喜助の股間を蹴あげていたのだ。

「バカ！」

お春は両腕をのばして、大きくアクビをしてから家へもどると、雨戸をビタリとしめてしまった。

部落にはこのような夜這いの風習があった。この事件は、ことに喜助とお春のかみあわせがおもしろかったせい、たちまち村じゅうへひろがっていった。それ以来、お春の渾名は「十郎左右衛門のアカ」から、「なっこぶしのお春」にかわった。さわると棘が立ち、からだには鎧のような堅い皮をかぶっているというのだ。そのとき、お春は十七だった。西藏にみられて、かじっていたなっこぶしをかくしたのは、お春自身その呼び名を置いていたからだ。なっこぶしがなっこぶしをかじるなんて、まったく体裁がよくない。西藏に対してお春は、そのとき処女らしい羞恥をかんじていたのだった。

十八になると花嫁修業にやらされた。花嫁修業とはいっても、別に学校へいったわけではない。和裁を習いにいっただけのことである。嫁にいつて着物ひとつ縫えないようではこまるからだ。山坂玄庵という漢方医の家だった。お春の家から、歩いて四十分ぐらいかかったから、およそ一里ちかくの道のりがあったにちがいない。それも一年じゅう、とおしてというわけにはいかない。農閑期だけの約束で、針箱をかかえては、「山坂の医者どん」へかよいはじめた。玄庵の妻が、内職に和裁をおしえていた。

お春の両親は丈夫で、病氣ひとつしなかった。カゼぐらいは、働きながらいつのまにかなおった。お春もその血統を受けついでも、生まれてこの方、医者に診てもらったことがない。姉妹三人の、上の二人はすでに嫁いでいたが、やはり頑健だった。祖母は九十五歳という高齢をむかえても、まだピンピンしていた。

医者という職業が、ふしぎなくらい現実ばなれしてみえた。そちこちでききしった常識とはまるでちがったものだった。第一、ひどく尊大ぶっていた。患者が往診を頼みにきても、ゆうゆうと盆栽に水をやりたりし、患家のあわてぶりを尻目に、二時間もしてからやっと御輿をあげるといふことが珍しくなかった。また、薬をつくるとなると、薬研やげんに木の根、草の根の類をいれ、ゴリゴリこすっては紙に包むのも妙だった。こんなきたならしいものが果たして効くものだろうかと疑った。その健康なお春が、医者の家へかよいはじめてまもなく、どうしたわけか病氣にかかったのだ。ある朝、めざめると足腰がひどく痛んだ。それでも起きて働こうとした。しかし、どんなにガマシにして起きようとしても、あたりがぐるぐる回り、襖絵が逆さにみえたりして起きられなかった。

病気に無関心な彼女は、熱のあることなど判断できなかったのだ。気がついてみると乳房の下が針を刺すように痛み、咳もでた。その上、茶褐色のくろずんだ痰を喀出した。意識は溷濁し、熱のためにはうわごとを言いはじめた。家族がおどろいて、医者呼んだ。山坂玄庵は、半白の山羊ひげをたくわえた五十年配の、細面の人だ。彼はそれでも、病人がお春だときくと、あわててとんできたのだった。

「だいぶ熱があるな！」

脈をとりながら玄庵は首をかしげた。大黒様のような、不釣合いにぶらさがっている玄庵の耳朶を、両親たちは不安そうにみつめた。

「どうも昨日あたりから、しきりに咳をするわいと思ってたが、この前ぶれじゃったんだな」

急性肺炎という診断だった。

「先生、だいじょうぶでしょうか？」

「もうすこし経過をみてみるとなともいえんな」

意識が朦朧とし、うなされつづけた。診察しているあいだも意識のなかったお春は、ちょうど玄庵が診終えたころ、ふとめざめた。そして、自分の胸がひらいているのを見ると、たいへんな粗相でもしたように胸もとをかきあわせた。

「先生、おれ、咳すると口から血がでるだ。——それに、両足のあいだからも血がでて、……みんなどこからでも血がでて、おれ死ぬんだべか……」

唐突に訪れた春のめざめであった。生まれてはじめての変調が、からだじゅうの血を騒がせてい

た。

「心配せんでもええ」

玄庵が言った。

「そのうちよくなる」

「心配しなくつてもええよ」

母親も言った。

「おっかあ、おれのからだ血だらけだ。おれ、今夜風呂へ入ってよく洗っちゃうから、風呂、熱くたてといてくんどな……」

「バカ！ なにいうだ」

夜這いや、その他の風習が、本能的に不潔なかんじをあたえたとしても、お春に、性的な正しい知識のあるわけもなかった。喜助たちがお春を誘いだしたとき、娘らしい嫌悪感からあんな事態をひき起こしたが、彼らの目的をはっきりとつかむことができたわけではなかった。

お春は、ふたたび昏睡状態におちた。

何日か死線をさまよいつづけ、ようやく回復の兆しがみえはじめたのは、五日めごろからだだった。七日めに入ると嘘のように熱がとれた。

「先生、ありがとうございます。おかげで助かりました」

ギョロ眼玉、山羊ひげの、ほそかれた玄庵が、このときほど崇高なものにみえたことはなかった。お春はよく大神宮様へ手を合わせて拝まされたり、庭に祀ってある弁天様にも、よく御飯をあ